

将来につなげる初修外国語教育

－ “学びなおし” の基礎形成－

荒武 達朗（徳島大学 総合科学部）

はじめに

徳島大学全学共通教育センターが 2010 年度前期に実施した授業評価アンケートにおいて、筆者の授業「中国語入門」は“シラバスと授業の整合性”の項目で良好な評価を受けた。それにより本誌編集委員から授業の実践例を報告する機会を与えられた。筆者はもともと中国近現代史を研究しており、語学教育を専門とはしていない。だが 10 年以上本学の中国語教育に携わる試行錯誤の中で得た経験は、エッセーとしてならば、紹介する若干の意義があるだろう。

クラスの概況

本学中国語教員間の人員配置の調整を経て、筆者は 2009 年 4 月に総合科学部対象のクラスから医学部保健学科 1 年生の中国語入門クラスの担当へと異動した。まずは対象となるクラスの概況を述べたい。

数年前に実施された全学共通教育の改革の結果、“国際化、グローバル化の推進”というスローガンとはうらはらに初修外国語単位の大幅な圧縮が進んだ。2 年次以降の学年では、総合科学部専門課程の学生の内ごく一部だけが英語以外の言語を学ぶことができる。大部分の学部学科の初修外国語は各学期 1 単位、通年 2 単位、すなわち 90 分授業週 1 枠、前後期 1 年間で終了し、その後は履修の機会を与えられていない。2 年次以降の教育につながらないカリキュラムの下では、継続して勉強しようという動機付けに乏しい。また配置すべき人員の不足により 1 クラスの受講者数は多く、40 名以上の受講生を擁するクラス、甚だしい場合には 60 名を越えるクラスが当たり前のように見られる。2011 年度の筆者のクラスは 55 人を数え、そして 2012 年度においては 69 人に達した。自明のことながらこのようなクラスではきめ細かな指導など不可能である。

上述の授業評価アンケートによれば、教科としての中国語は“シラバスと授業の整合性”（語学全体の平均 3.81 に対し 3.47）、“説明・発声の適切さ”（全体 3.94 に対し 3.65）、“創意工夫”（全体 3.83 に対し 3.57）、“総合評価”（全体 3.86 に対し 3.63）の各項目で全科目中最も低いポイントを得た。“目的意識”が語学全体の平均 3.72 ポイントに対して 3.36、“学習時間”も全体平均 2.62 に対して 2.23 と、これらも相対的に低い数値を示している。中国語はドイツ語と並んで受講生が多い教科である。アンケートでの低い評価は必ずしも教員の責任に帰するものではなく、受講生数の相対的多さに起因すると考えられる。いずれにせよここから

は何となく履修登録し、目的意識を得られぬまま受講し、予習復習に時間を割くこともない一群の受講生の存在が窺われる。「私は中国語を勉強したい」という積極的な受講生も一定数いるかもしれない。だが開講時間の少なさと大人数クラスという現実に向き合うと、彼らの熱意は次第に失われる。前期が過ぎる頃にはクラスの片隅に消極的な受講生が増殖していく。

このような条件下では一体何に重点をおいて教育すればよいのか。

授業の方針

語学の授業を受ける学生は、コミュニケーション能力を高めたいというニーズを多少なりとも持っている。改めて述べるまでもなく旅行会話程度の常套句にしても実践する機会がなければ定着しない。初修外国語の教育は英語とは異なり全くの初歩から行わねばならない。一般的な教育のペースに基づけば4月の開講後数週間は発音学習が中心となる。日本語にはない母音や子音を習得するには本人の努力とセンスが必要である。1度の説明と実践で体得できる者もいれば、数度の説明を経ても理解できない者もいる。発音の要領をつかむことの出来なかった後者は、その克服を課題として抱えたまま5月以降の文法や会話の学習へと進む。そこでは発音を矯正されることはほぼないと考えてよい。折に触れて彼らに対するケアをすればよいのだが、上述の開講授業時間数の不足、大人数クラスという制約によりこれに応えることは出来ない。せめて教科書のフレーズを何とか覚えさせ、1回か2回しゃべる機会を与え、それをコミュニケーションと称してお茶を濁し、そして忘れられていくというのが、授業の実態であった。我々に常に向けられる批判、例えば「会話のママゴトに意味などあるのか、初修外国語を学ぶ意義などは無い」との指摘はこの点で正しい。さらには「どうせ忘れ去られる知識であるならば異文化理解を目的とした講義に転換してはどうか」という要望に対しても有効な反論が出来ない。

筆者のクラスでは、コミュニケーション能力を身につけさせることは不可能と判断し、会話練習などを基本的に放棄した。その代わり発音の体得・基本文型の習得に特化した教育を目指した。その目的は、受講生が将来的に中国語を学びなおさねばならなくなった時に必要となる能力を育てることにある。中国語を自ら学ぶにあたっては、正しい発音の習得が最も困難とされる。この障害をあらかじめ乗り越えておくことで将来における“中国語の学びなおし”の負担は大きく軽減される。たとえ学ぶ機会に恵まれなかったとしても、旅行会話帳のフレーズを正確な発音で相手に伝える力は汎用性の高いスキルであると考えた。

授業の実践

この方針での教育は変化に乏しく、受講生の興味をかき立てるものではない。また語学学習には停滞する時期、我慢しなければならない時期がある。そこにさしかかると受講生の意欲はとたんに下がってしまう。そこで彼らへの要求水準を下げるか、或いは映像や音楽、パワーポイントを駆使して視聴覚的に授業を展開していくのも有効な方法である。対して筆者のクラスでは我慢して反復練習を積み重ねることが唯一の道であり、その先に“中国人もビックリするほどの”きれいな発音を習得できる(かもしれない)と諭した。知識の定着や能力の向上について

は個人差がある為、期末テストの段階まで批判の材料とはしない。ただし授業に対する態度や努力のあり方は個人の責任であると考えられる。具体的には睡眠・内職・姿勢の悪さなどには断固とした態度で臨んだ。目的と方針、判断基準を開講直後より繰り返し強調することで、受講生の表面上の態度は改善した。

発音の指導に当たっては「これは教授済みである」という説明放棄は行わず、姿勢、口の形、舌の位置、発声方法は幾度も説明しなおした。授業という場での練習は全体、せいぜい小グループが単位となる。小さなグループであっても集団であることを頼みとして練習を怠る者が見られるが、彼らに対しては厳しく注意喚起し、別途に練習課題を与えその遂行を強制した。とにかく声を出すこと、口を開けることを基本として 1 年を通じて教えた。文法の習得については毎回練習問題をレポートとして課した。基本句型を用い問題に数多く取り組ませることを通じて中国語の語感を身につけさせた。

本授業の特徴として個人レッスンの実施がある。クラス全体の練習ではどの受講生がどのように発声・発音しているのか分からない。それぞれの受講生が「どのように口を開けているか」を確認し、該当者に「正しく口を開けよ」と指示するのが限界である。10 人強の少人数グループの練習ではある程度の発声・発音の矯正には効果的であり、彼らが「大きく声を出しているか」を確認することができる。だが「個々人が正確な発音をしているか否か」は依然明らかではない。教員の耳に聞こえてくる音声はグループ全体の総和の平均に過ぎない。各人は上手と下手に加えて、それぞれが微妙な癖を抱えたまま何となく発音をしている。

そこで筆者は 1 週間に 10 人～15 人の受講生を指名し、指定時間に研究室に出頭、教科書の課題文の音読或いは暗誦を命じた。大体 1 人が 1, 2 ヶ月に 1 度来室することとなる。授業の進捗についてこられない受講生を優先して指名し、また授業に向き合う態度の良好ではない者には罰則を科して課題に取り組ませた。所要時間は 1 人あたり 1 分程度であるが、彼らは多くの時間をその準備に費やさざるをえない。予習復習の時間が増えることで、当初は非積極的であった受講生も、次第に積極を装うようになり、やがてあきらめて主体的に授業に向き合うようになった。

このような授業の実践は教員と受講生のやる気が持続されることを前提とする。筆者のクラスではこの個人レッスンに必要な時間を捻出する為に毎回の授業は 10 分から 15 分早めに切り上げて終了した。夏季には膨大な電力を消費し空調に頼ろうとも、結局炎暑により効率が上がらぬ為、規定よりも 1,2 週間早く閉講した。これにより教員・受講生ともに士気が高まり、授業以外に別途出頭を命じられることに対して不満は出なかった。

おわりに

1 年を経て受講生の中国語能力は、文法習得の到達度は個人差が大きいものの、発音はほぼ全員が格段に上達した。これは彼らが「学びなおし」の必要に迫られた時に必ず役に立つものであると筆者は考えている。

本授業では学生に対して厳格に対処した。この点は彼らの一部にとって受け入れがたいものであったと思われる。ところで、大学を卒業した学生を待っているのは理不尽な社会である。彼らはとにかく我慢して着席し、目上の人間のつまらない繰り言に耳を傾けねばならない。これは如何なる文化圏においても、実績と実力に欠けた人間に科せられた宿命である。語学の学習は忍耐と切り離せない。彼らにこのことをきちんと学ばせることは、語学の学習以前の問題、社会性の涵養という側面でも有益である。波風を立てず大過なく卒業させればそれでよし、というの見識の一つであろう。ただし学生のニーズというものは、現在学生である彼らが全てを理解しているわけではない。

当クラスは以上のような精神論を事ある毎に説き実践するので“整合性が高い”と評価されたと理解している。分かりやすく言うと、「このイヌはかみつきます。注意しましょう」と書かれた看板（シラバス）を信用せず、イヌに手を差し出したら本当にかみつかれた、嘘じゃなかった、という評価にすぎない。語学教育を専門としない教員に出来るのは、この程度の内容の授業である。筆者の授業は教育というよりは調教ではないか、との批判は甘んじて受けたい。

しかしながら随分と後になって筆者の授業を受けたことを思い出す学生もいると聞く。望外の喜びである。